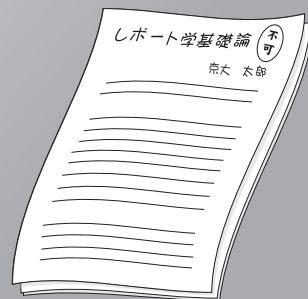


新入生歓迎特別版

はう HOW れぽーど？

パンキョー篇

新しい生活に慣れはじめた頃には前期も終わりに近づいています。そして、「単位」について最初の関門が待っているわけです。試験もありますが、レポートを書くというもおそらく多くの新入生が経験することになると思います。ここでは、全学共通科目（パンキョー）におけるレポートについて見ていきましょう。



作成手順

まずは一般的と言われるレポート作成の過程について見ていきましょう。

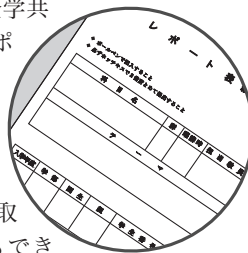
Start

- ・ テーマについて思いつくことを挙げていく
- ・ テーマを絞る
- ・ 絞ったテーマについて思いつくことをさらに挙げる
- ・ 大雑把なアウトラインを作る
- ・ 必要な資料を集め、整理する
- ・ 最終的な詳しいアウトラインを作る
- ・ 序論・本論・結論で書く

この手順はどんなハウ・ツー本にも載っていますが、実践している人は意外に少ないのではないのでしょうか。レポート作成に詰まったときは、基本に戻ってこの手順を思い出すといいでしょう。

レポート表紙

文章を書いた後、表紙をつけるとレポートは完成となります。京都大学では、基本的に全学共通科目のレポートには指定の「表紙」をつけることになっています。紙の無駄と思うかもしれませんが、レポートには表紙をつけるのが正式ですし、取り扱う側としても統一されているほうが便利なのでつけたほうがいいでしょう。表紙は全学共通教育棟のレポート提出場所に備え付けられていますので、レポートを提出する際に取りに行くこともできます。



Q なぜ大学のプリントはA3やA4ばかりなんですか？

高校までは、ノートやプリントもB判のサイズがほとんど。しかし、大学で配られるプリントはA判が多くなります。「ノートにはさんだらはみ出ちゃう」なんていうあなたも、A判しか使わなくなったら立派な大学生かも？

このような差が生じているのは、B判が日本独自の規格であることに原因があるようです（B判のサイズは江戸時代の公用紙である美濃紙に由来）。高校までは日本の規格であるB判もよく使われますが、A判がISO国際規格になっているため「大学」という場においてはそちらが優先されるということでしょう。

中には、A4でのレポート提出を単位の必要条件としている講義もあります。

レポートいろいろ

さて、一口にレポートといってもその種類は様々です。この記事ではA群（人文・社会科学系）のレポートを中心に扱っていますが、B群（自然科学系）の授業でもレポートが課されることがあります。その代表的なものとして実験の授業があります。実験を行った後、まとめとしてレポートの提出が求められます。考察などが不十分な場合は再提出を求められることもあります。

中でも、物理学実験は、予習・復習など含めると10時間以上もの時間が要求されるということで全学共通科目の実験の中では相当厳しいものです。添削も厳

しく、ご丁寧に誤字まで指摘していただいた、という話もよく聞きます。

物理学実験を筆頭として、実験のレポートは比較的重い傾向にあるようですが、B群のほかのレポートは、高校時代のように問題を解いて出すというのが大半です。

対してA群ではジャンル自体が複雑なため、テーマ設定や絞り込みが困難なレポートがしばしば見受けられます。また、資料集めを怠ると感想文になってしまいがちです。ただ、単位だけなら何気なく書いていけばもらえるものも少なからずあるようです。

— 珍？レポートお題 —

京都大学が誇る個性的な教員たちが課すレポート課題の中には一風変わったものもあります。たとえば、

●水資源について、「水」を季語に和歌を作り、鑑賞文をつける。ただし、でき限り短くすること。

●著名ロック歌手の歌を聴き感想を書く。

このようなレポートが課されると、悩んでしまう人もいるかもしれませんね。

はみだし
すてーじ

履修確認表を紛失したので、自分が何のテストを受けたら良いのかいまいちはっきりしません。
⇒履修登録できなかったのを何を受けても無駄なことはわかっています。

(文・2 カレッタ)
(もう投げやりな態度です；編)

感想文との違い

みなさんご存じの通り、レポートは日記や感想文とは異なります。それでは一体どこが違うのでしょうか？

それは、独創的な意見を述べる前に、題材を熟知していなければならない点です。特にレポートにおいては、自分の主張が題材の主張に対して論理的に結びついていなければなりません。題材の主張を読み取り、それを踏まえて自分の意見をぶつける、まさに題材との対話であると言えます。

もうひとつ、日記などは唯我独尊の世界でもよく、個人言語を用いて書いても

問題ありませんが、レポートではそうはいきません。コミュニケーションを図らなければならないからです。こちらの認識と、相手の認識が共通の地平にない限り、議論が交わることは決してありません。それゆえ、レポートでは、自らの主張について相手と共通の基盤を持つための努力——章を分ける、文脈を明確にする、引用・索引などを完備する——などを怠ってはならないのです。

また、「感想文は評価の対象外です」という講師もいることはいます。しかし、全学共通科目のレポートでは、課題の内

容が実質上「感想文」になっているものも存在します。レポートはほとんど優だったという総合人間学部3回生のKさんは、「1回生の頃は書き方をよく知らなくて、感想文みたいになったことがありました。でも単位はもらえましたよ(笑)」と話してくれました。

一方で、感想文を書いたら実際に落とされたといった話もあるので、注意する必要があります。



引用について

レポートでは、自分の意見について述べることになります。そこで必要になってくるのが、自分と他人の意見の識別です。レポートというものが根拠を伴わなければならない以上、多くの場合、「関連資料、文献」を参照しているでしょう。これらを引用した場合は明記しなければいけません。参照した文献は索引を最後に載せるという約束があり、色々とルールがあります。索引の載せ方だけで単位を剥奪されるなどということはないでしょうが、一度ウェブサイトや書籍で調べてみるのもいいかもしれません。

コピペはダメ！

ウェブサイトなどから文章をコピー＆ペーストしてレポートを作ることをコピペと言います。これがバレると当該セメスター、あるいは当該年度の単位すべてとお別れすることになる可能性があります。コピペをして良い成績を取る人が存外周りにいるかもしれませんが、安易な手段に走るのは良くないことです。

また、レポートの中には、「手書き」しか認めないといったものもあります。時代に逆行していると思うかもしれませんが、安易なコピペを避ける手段でもあるのです。

Q レポートに「起承転結」は必要ないのですか？

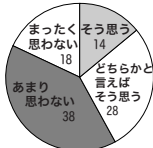
レポートは基本的に「序論・本論・結論」とすべきであると言われています。論文のようなものですから、「ギャップ」があってはいけないということでしょう。

しかし、「みなさん、起承転結で書いてください。転に期待してますから」などとおっしゃる教員もいらっしゃるようです。教員の発言・性格などから判断しないといけないということですね。

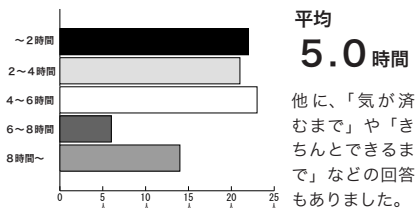
ただ、「講義が起承転転……なのにそれについて序論・本論・結論で書きようがない」などの苦言もよく聞かれます。

京大生のレポートの捉え方

Q1. レポートの評価は、そのレポートを作成するのにかけた時間に比例すると思いますか？



Q2. 1つのレポートに割くべき時間は？



(読者カード集計による、回答数98名)

レポートの評価

レポートを提出してから気になるものと言えば、当然レポートの評価でしょう。評価について京大生が感じていることは左の表にあるとおりで、レポートの評価は作成時間に比例しないと感じている人が多いようです。「教授に逆らった内容を記したらギリギリで落とされた」などということを聞くことがあるかもしれませんが、ほとんどのレポートは返却されないで実際のところどうなのかはわかりません。そもそも、教鞭に当たった先生が採点したかどうかとも疑わしいものです。落ちたのは、単に非論理的だったか

らかもしれませんし、内容が不十分だったからかもしれません。

ときには採点者の受けがいいように“捏る”こともあるかもしれません。しかし、受け以前に、レポートを提出することは採点者との対話であることを忘れてはいけません。レポートは筆記試験と異なり、机に向かい一人で頭を抱えて書くことが多いでしょう。だがしかし、レポートは題材という他者との、採点者という他者との、対話である、ということを忘れずに取り組んでほしいと思います。

はみだし
すてーじ

集合写真からはみ出るとせつないよね。
⇒あとで別枠に入られると目もあてられません。

(工・2 土井立樹)
(写真には写りたくない；編)